

『神との交わり』 (ヨハネの手紙 第一 1章1-10節) 2022.10.2.

<はじめに> 10/21は私たちの教会が属するイマヌエル綜合伝道団(教団)の77周年の創立記念日です。キリスト教会は数多くあり、共通点も数多くありますが、それぞれユニークな特徴や経緯があります。自分が集まっているこの教会(団)をどのように紹介しますか。

I 私たちの交わり

①イマヌエル

教会(団)の名前にある「イマヌエル」とは聖書に出てくる言葉です。マタイ 1:23 を開いて確認してください。生まれ来るイエス・キリストの存在と役割がこの呼称を体現している、との預言(イザヤ 7:14)の成就です。

②ヨハネの証言(1-4)

ヨハネはイエスの12弟子の一人です。ヨハネの福音書や本書を記したのはAD80年代後半で、老年になっていました。彼は自分が直に接したイエス=いのちのことばについて証言し、読者にも同じ関係を持ち、お互いの喜びが満ちあふれるために本書を記しました。

③交わり=コイノニア(3)

ギリシャ語コイノニアは親密な相互関係・参加・共有を表します。出会い・接点から始まり、その関係が続いています。「私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです」(3)。「イマヌエル」は私が体験し、その中に生き、周りの人に分かち合うものです。

II 神との交わり

①神は光(5)

ヨハネは、目に見えない神を「光」として紹介します。イエス自ら「わたしは世の光です」(ヨハネ 8:12)と証しされ、それを聞いたヨハネも重用しています(ヨハネ 1:4-9)。対比される闇と合わせて、道徳的・心理的・霊的な意味を象徴的に表しています。

②告白と現実のギャップ(6)

神との交わりは光の中でのみ成り立ちます。神には闇が全くないからです。神と交わりがあるとと言うだけなら簡単です。しかし、現実生活と心中を闇が覆い、その中に生きていることがあり得ます。そのような人が、ついやってしまうこととは何でしょう。

③光の中の交わり(7)

神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、神との交わりが成立します。「互いに」は6節の独りよがりな認識との対比です。神との交わりを持っている者を、御子イエスの十字架の血がよいよ罪からきよめて、神に似た者へと変えてくださいます。

III 神と交わりを持つ

①罪がないと言う(8)

罪は神との交わりを阻害します。ならば、神との交わりに生きるためには、自分には罪がない、悪くないと言えればいいのでしょうか。自己診断には限界があります。自分を欺き、偽り、本当のことを直視できません。私たちは神の眼差し・光によって探られる必要があります。

②神からのアプローチ(9)

私たちが罪を持っているなら、神と共に居れません。しかし神は私たちと交わりを持つために、私たちの罪を赦し、すべての不義からきよめて、光の中に移す道をイエス・キリストによって開いてくださいました。その条件は自分の罪を正直に告白することです。

③神は真実？偽り者？(10)

「自分は悪くない」を主張するなら、全てを白日の下に明らかにすれば済むことです。それを拒み、気色ばむとき、光なる神さえ偽り者と言いかねません。これこそ大いなる誤認、罪となります。

<おわりに> 神との交わりは光の中にあります。そこでは本当の話ができます。たとえそれが暗く罪深いものであっても、正直に真実を打ち明けるとき、神は私たちの罪を赦し、きよめてくださり、光の中へと移してくださいます。私たちの交わりは本当の話ができているでしょうか。(H.M.)